俳句日本

八九月合併號

第一卷・第十一號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十年九月一日（毎月一回一日）發行

昭和二十年八月廿五日印刷納本

有隣亭蔵書

目次

俳句日本作品……一
鎌倉雜記……荻原井泉水……九
新俳句論考（七）……西垣卍禪子……二一
指針を記す（八）……中塚一碧樓……二四
選句錄……卍禪子選、井泉水選……一碧樓選……二六
後記……三〇

俳句日本作品

うぐひす、外人墓地茂つて　村尾草樹

みみずは土に、水平らかにして魚棲むのを釣る　米倉勇美

雛をまつる傳統に生きぢびしい夜空　森抱葉

獨りぼつちの想ひ出丘の薄は薄をゆずる　松尾十樹

隣が病んでゐて庭の胡麻の實がはぢける　早川昇

ぱつと咲くさくら味方機だけの空　仁王門大提灯もなくて雲　照井稗人

風が時々といふ區劃から區劃へ雲山のいくつが畑　亡母と食べる氣のほうれん草萎ゆな遣々垂り包み　吉岡久藏

兵舍裏暖かな、つらつらとけてゐる　鎌田一相

雪靜かに一隊の足音足音子を思ふ　渡邊まき子

春の日さんさん當の顏で塀によつてる　佐藤大峯

馬も征きましてとカヒバ桶など　佐藤吟雨

雪山も樹林もふるさと四十九日滿月　宇野冬錄

四十二軒の分家をもち家裏一本の榧の木をもち

月のひかりへ剃刀をあてふるさと

ふるさと月の落ちてより明けてくる雪山遠景

戀心ねこやなきほゝけてゐる　照井稗人

征かれて紅梅の池に風立つてゐる　森谷乙山

熱心な繩作業の子の目もしんじつ勝つ

寒風にながぢ話はふきながれて色々な菊咲きそろふて

青梅も景色のなか人の動けるも泉州百姓

奈良へとめぐつて來たひとり埃を拂つて　鎌倉白羊城

擧手の禮正しくも雀チチと明るし

みんなの麥は伸びきつてうれしい雲雀と　山木六合

日がさずと泳ぎ出す鮒毎日そのよう凍る鮒

勤労動員隊の歸る土橋で冬木の鴉　鈴木梅宇人

新緑の山せまる杉鋒の山水音にはなれ　谷口一溪

初日に雪の連山この朝を征く君　伊藤岳原

年末か人通る鋸引く手すべ双子山は雪　關口比呂志

二夕坪あまり山葵の青の時雨る山家へ　伊藤水穂

神さりぬ人の家も萱の屋の雪たかき

雪けぶりすぐからにまぶし陽の髪濡るる　中山百姓

葬りの土の音と雪し炎むらたつべの星

雪がある家でこの人戰にゆくしづかなきもち　中山巨子

それとなく茹湯の話手自慢な蕎麥とは謂わず　中山貞男

殘り陽嶺に川下げ衆焚火を山峽の冷ゆ　池田亜杜子

三月雪多く部落見おろし

二月厚い雪で屋根屋根でそのやうあるく

天さむかない雪ふる人に出逢ひ

職場の飯雪ぬくゝふるで

雪はら柳のやうないく本でかげし　九貫十中花

げさ凍てゆるみし木の根のそこら遊ぶこども

木の雪を落すに壕の口こちら向いてゐる

雪を溝にすつる一人は防空頭巾脱いだ

私らわかさぎを食ふ一夜風音

春冷えわがまへの工員出勤表とその壁　山田蒲公英

草の茂り木の茂り樹の幹は太し

こゝに馬鈴薯の花が咲く山畑が傾斜

木のもと茶碗など埋め木は青く立つ

さゝげの藪高しさゝげの實太りて青し

われこの日壕の上を這ふ南瓜生つてゐる　淺野麗木

春日そこのいはほの周圍に少しのこる潮

日々わられに草芽たつ小徑となりし

よもぎなど摘む母の麥子の麥池の水滿つ

そして草崩の地べたにすわる女のこどもたち

巖を見そこにうごいてゐる春の潮を見あるき　蓬萊鶯郎

供木やまの雪を踏む鳩の羽根音

大寒水の味夜は更けし家の内に

大寒海へ〳〵志す男の子大日本
杉冴返るに立つ社頭暇乞の郷兵
肩までの雪で眞中を一列で通る町で

福嶋一思

遠いところ御社と拜す道の焚火のけむり
杉ほそ木にて四五本は立てり赤土山がこの冬
菜種に花咲いた窓から顔出してもの言ふ男
一機味方機と見る竹の秋の雲の白くて
辛夷花咲けば白ければこの山をいでんとす

谷しんいち

五月の日朽葉ふんでのぼる山道子供と
曇る日並んで麥畑の向ふ一方の空を指さす子供
日のくれくりやの煙りする家の中盆の日
何か鳥がないてゐた夏の日今日にごつた湖の水

木内柳陀

寒梅にほふ家人三人居り
寒梅灯に人のかげ大きく
はきものを穿き吹雪にふきおくられ
ふゞき眞直の灯を見た

今井六石

佛へて春夜を暗うす大き星一つ
けふ家に甕の水みたし春の夜くらく
春めく人群のいきれも愉しき通勤
戻りてねむる一兒軍服壁にかゝり雨溫

西山刀耕

建禮門み前の石ころ春のかげし
凡邊硯屏立てり葵神草にして
むべの花の大いに咲く比良の腰のところ放流區
その榊を青刈麥の鎌ひきつけ

根岸榮一郎

冬の日暮れてくる子達が遊ぶ廣い地めん
日が暮れる枳殼の實がゐましく
耐へゝ水仙花咲いた朝の空間
りんごつやゝかにころ〳〵着ぶくれた吾子との夕

山原微風

星空寒し土堤を磧を戻り
軍旅の部隊がならぶ空があかい冬の日
みかんの木々日さし冷ゆる膝がしら
雪ふるせまい家の口を出はいりずるこども

武居泊雨川

冬の草青し胸に陽の射す
田に水あり田を追ふて芹を摘む人
國に殉ずるこゝろ山がこぶしの花しろい
春の日人を導きて見る滑空機胴體

今川溪花

野ひろし一方梨の花白くつゞく野のくもり

池べ雪殘り釣する人のうしろを通り
雲厚い日堤の草木瓜の花
のびるもとりたり蓬びつしり生ふる暖日の磧

堀川屈人

少し汽車に乘つて山間の畑に行く外套をぬぐ
日當りし霜どけ畑わたし動く
朝の地をあるく春雪をあるく
漁師舟を抱へるやう濱へ押し上げる春日

松宮磨研

蕪を漬ける莖石二つが二つ輕く
赤い蕪を漬けたり雪が降つたりくらす
舟に漁具を積む人にけさ寒さがゆるむ
男霜且纜を解く海のひろさを感じ

梶田羊介

車が寺院の角わたり榕樹が樹根を垂れて
清掃の人綠の生彩の中にして園の椅子見ゆ
警報だから塀のところの草の穗ゆれて待つもの
ひそみて待つ低いところに草の匂ひ

中田紅甫

夕べ曇ると見し無憂華蕾の空の
地暑しとおもふ少年の足と山羊の足
素馨しら〳〵窓のうち印度人母子れむり

加藤羽双

防備日々こゝに水仙を活けし餘裕
のじこ來隣組垣根めぐらしてはゐる
寒夜を待機どことなく眞夜中

細木原青起

苦持ちたる草あり人と別るゝ
根深く匂ふを野草摘みたり
虎杖嚙んであるき日を背にして

若林乙吉

飛機雲を出づる木肌はつきり冬山
戰果はつきり冬の山根山根に壕を掘りて
秋草に待避すそしてそこに岩あり
夕陽の山一走り炭荷負ひ下りる男
もろこ燒ける次ぎ次ぎたうべ狹い部屋

宮林釜村

丸く肥えて枯蓮くゞる鴨の親と子
早春の太陽白しわれ東京を捨てる氣持
三月の星々大きく輝きふる鄕
一ところ殘雪踏みて來し炬燵高き家うち
夕がすみ老人彌藏林檎畠を出でず

鈴木あつみ

雪のみち話すものゝない雪をたべて憩ふに
どん〳〵雪つもらせてゐる青い木の他はおもふまい
雪解の水がひたす笹生ふるこのみち

繪のやうな雪景色の中から死んだ兎をかついでくるか
飛驒山脈凹んだところの雪山のそれに眞向ふ　南晴星

ぐるりの木へ來雪ふかき朝を尾の長い鳥
くろく池水ありふどく中子らいでゆく朝
壕までの雪を掻き妻子とありて雪てり
雪ふかい夜みちほのあかり人ゆきし一すぢ
雪汁のみち小柄でにこ〳〵來るしろい顏の爺さん　木村綠平

青い空、青い葱なども一寸作つてあつて一家團欒
家が石垣の上空がくもつてゐる風が萱の穗(平尾にて)
久しぶりも久しぶり枝豆のたべ殼が鉢からこぼれる(春一來訪)
馬のおとして行つた糞拾ひに出て朝月と霜
机から雨を熟れてゐる稻をいちにち雨ふる柿の木　池田詩外樓

雪から桐が一本雪やんでゐる
問ふて蒔き貰うて植ゑた畠の豌豆そらまめ咲いた
たまさか客のある旅館が二階あけて河原が夏の景色
とられさへせれば南瓜一つ二つは大きくなつてゐる見てゐる
すこしは快くていつものくすりを、けふは奥さんの調劑　井手逸郎

春の雜木山が枯れてゐる山の池が見えてくる道
柿の葉はひらく戰災疎開の人ら耕してゐるはたけ

春の日、日かげから日なたの方へある道
春の日家に近く田の畦を流れてゐる水
白いばらに春の日のかげつてしまうてゐる道　財馬呵歩

配給に籠さげてお邸からつん出た松の木
ゆさぶつて掃いてゐる朝の陽のさし
かうもり傘のかはくともう暮れてくる
麥の芽一人遊んでゐる子のその家
土手草風ふけばそよぐ　山本蒼天

花には花の靜かさがあつて夕べのくもり
川原はしづかな石の、日ざしも石つんだ舟が行く
たわわな柿のいろこの家征く人あつて集つてゐる
索道から徑、山はずつぼり紅葉の雨で
稻田今年のうれやう此のみちを出征てゆく　山本木天蓼

さくら活けて夕明りの夜のさくらも
素足に赤い芽が出てゐる
間引菜盛ればこぼれる籠に盛り
川船待つ女の春晝のその連ではなく
十字架もふるびた青葉の窓がしまつてゐる　青木菁華

ことし遲く咲いて谷間の梅の今がま盛り

疎開の跡は一本の梅の咲きほほけてゐる雨　小川都影

小雨早春の道の砂ぬらして松林の中　田中井夢

この雨あがれば暖かになりさうな雨の梅咲く
島も見えぬ曇り日の朝は靜かな松の蕊　藤崎麥村

海、工場は迷彩して一面蕎麥の花くれのころ
ではとその眼が背むけてゆく背の日の丸（吾子入營）
ついて桔梗の紫なる今宵障子の明くて泊る
晝蟲なく空が明るくなると草の縱横に通じてゐる道
墓へ來て赤い實の空もふるさと　高橋良太郎

夜明けて着いて船の吐くけむりが空きびしい冬
此の冬のきびしい白いほしもの夕べ海のいろ
冬朝・水仙一輪仕事一日戰死
石きざむ音のして石屋があつて冬のあたたかな、通る
雪の日いへに迎へて白きみたまのつつみにて　鈴木折嶺

松葉つんだよこに腰かけ渡舟にて冬風
雪を詔勅も遷しまつりて長し飛機近接（二月二十五日）
かしこし御影負ひ奉りて春を吹雪く
午からは鰯の影した障子などの畠みち
凧の動かない星がラヂオ今夜も愛國詩朗讀　和田光利

うみなり朝となりけむり出しけむり吐く雪
雪につぼみはみこぼし梅の木の下
みゆきおぐらきところに死んで村のとしより
今朝は凍みに乘つておさなきも遠く出てゐる
防水の氷のあつさすててあつてとけない　鈴木折嶺

麥蒔きに出る組は出て行き午後の體操はじめてゐる
海のそばの家々の旗に海の日かたむいてゐる
日へ枝さし交はしてゐる冬木の下の地震小屋出はいりする
曇つて池が一枚寒の入り
學校が麥踏に出てゐる段々畑のしたの道椿の花　鈴木蜻郎

霜夜の警報鳴りおへし山がこんばん月明
松も、枯山に陽があたり子ども拜賀式からもどつてくる
兵隊兵隊に擧手してとほるさくら落葉
雪やむと日がさすと小鳥きてゐる
箱に兎飼うてゐるこの家の子青菜畑　杉田作郎

月が暗くて鋸の齒のやうに立つてゐる山々
毎日雨のしとしとと降筍竹となつて日暮れ
丸い山も尖つた山も夏が來てかつこう
卯の花盛り田植盛りで毎日雨ふる

深雪にふる雨は浪にもふり四五軒
深雪へ洩れてともしびきけば大本營發表
身一つでのがれてきてそこにはらからのかほみちのくの雪

古林巴水樓

今年は梅もびつしりつぼみ防空體制完璧
建長寺迄は日あたりの流れてはゐる枯れてゐる

井上一二

雲染む屍と君征きし冬日凜烈
神鷲神となる讃岐山山靜けし
師走の學校で唄つてゐる青い菜つ葉のうれ
うちの梅やよそのうめや咲き戰局苛烈

橋本淳一

けふ雲上をくる機にもだして肩に雪降る
とどろな投彈音を總身に雪降る
帝都上空に飛機なし妻も頭巾の貌に雪ふる
燈は蔽うて春の黑い椀から汁をふきて食べる
きさらぎの月に雪塚の雪が汚れてゐる

金井三良

一人は梢をたわめでのつて山は春風の吹く
たまつて落葉かはいて日のすさる時のふみ下りる
ふむに砂のこぼるる夕日うけて蘭の咲いてゐる
青空强い風のゆするがままにして白し辛夷
窓に日のさす鳥のこゑ人の働くこゑ

原蝦蟇子

アルプス尖つて風のある天氣の日に見る梅の鉢
雨がはれるとすぐ陽がさす水鳥が湖の岸近く
毎晩月があかるくなるをと土藏
屋根に霜白く川波動く舟にもおく霜
村を流れて用水川用心よい村月あかるい

柳田流矢

年寄り松の根を掘り日永しぬくとし
けふは鍊の配給の鈴がなります芽ぶきます
酢を造る酢の匂ひ貧乏德利の口が早春
蒔いてほうれん草の二たうれ三うれ日が照る
茂りて奥の細路牛ひいて女が通る

木戸夢郎

防空頭巾が嬉しうて繩が飛べてゐる
朽ち木のやうにほろほろで飯たべてゐる
烈しい世の一隅の寒ンに咲くものの花白し
字書き葉に字を書く子で冬が曇り日
墨すつてゐる雪が來てゐる匂つてゐる

近木黎々火

杉の木湖の凍り旅人である
木の冬を木の實おちてゐる古墳
けふ飛機のもと輪飾きつちりゆはへ
凍る雪に粉な雪骨壺を抱く

草も枯れる木の中銃眼を見る　池原魚眠洞

日のさして水車あらはに林の枯れてゐる
若き神々を思ふにつけ私の學徒朝々朝會霜深うなる
のびたとまでは思へない日の暮れ際のポプラに出てゐる星
枯芝、風ににげたがるにぎりめしの新聞をおさへる
枯山へ登る道が青菜畠人のゐるそばを通る

奥村四紘人

雪解水に子たち玩具掘る燒原渺茫
殘雪に妙齡の寫眞笑ましくもずうつと燒原
遂に行衞不明燒原に早春の日は沈む
戰火の果にちよこなんと春寒く勸先殘り
過去は過去さあちやがいもどしどし植ゑろ

原鈴華

消燈ラッパきいて寢る機銃の音つづいて
船酔もなく大浪こえ海峽こえ風こえ

内田南艸

春の星を氣づかずにゐる罹災の一ト夜二タ夜
燒跡人が住んで月夜の話がもれる
話は波打際へ來てしまうた貝殼一つ一つ
翔つは鷹か木立の隙より見ゆる湖
春を待つ幾日幾日刈田の光見やりぬ

松宮寒骨

雪渚つぎつぎ鯛かづく男をんな
土手をなきつゝ牛ながい影動く草枯れ
少年工銀杏たべるみんなだまつてたべる
鯖船水だぶついてゐる海動かず
野のうす雪を來て水をのむ裏口

秋山秋紅蓼

燒跡どこまでもたしかに春である空に佇つ
空にさくれつするものの夜を身のまはりはつきり
梅のほのかなるをともさない障子
竹に散る雪よ竹に陽のあたり
水仙の花白くむきあつて影する

安齋櫻磈子

彼女越えて行きし山の空梅雨空
とかう一延べの機絲を織り切るかきつの花に
耕しにもひとり花をもつくるみの下
ひとり朝々の水汲みに來る春の木の中
ひとり居る山に眞向に吹いて青東風

内島北琅

窯の屋根の雪とける一人火を焚く
ほのほ浪打ち音たてる寒夜陶窯
窯を焚く夜となり雪の屋根屋根
陶工窯の火にかがまりて雪夜深々
雪山あきらかに夜明け窯に火を入るる

梅木に沈丁花にいちにち〳〵凍日　細谷不句

鴨くれて往つたおやぢチフス熱やみし言傳　焦土のどこからか葭切來鳴く吾家燒けず　荻原井泉水

霰降りたまり少し焦燥をかんじ人ら　飛行機は美しと諸植ゑた泥足をあらふ

寒の日が來干からびた菜二把くれるばあさん　旱の月の明るくて甘藷畠深夜は露ばみ

麥畑楢林中えんとつ煙りゆく機關車けむり　諸は蔓がへしせぬがよし梅雨明けの雲白くなる

降つてから二三日の道の雪朝日を行く　伊東俊二　ことし盆花もなきほうづきが花のやうなるを

大きなかぼちやと、花がまだ咲いてゐる石垣　芋植ゑてから信州一まはりしてかへりし芋の葉

デパート藥賣場はあつてひびぐすりうちへ買つて　中塚一碧樓

けふは薪があつて薪で焚いてゐる火の音の妻　種を蒔くうねを立てる眞直なるうねと僕と

吾子よこれが雪である松にも梅にも白い雪　大越吾亦紅　菜の蕾が立ちし風情が垣べ

雪のうへ雀三羽木の枝の三羽にて鳴く　枡ありて枡の形このましき春朝の日ざし

てつぽう川の鴨をうてるらしいあの川の鴨　紫蘇の芽生えがいくらでも生えるところにしやがむ

出勤どきに必ず桐の木に鴉が居つて冬　死ぬ日まで小川のへりの青い草叢　西垣卍禪子

雀のおしやべり立春あとの陽があつて家の木

朝日に立つて知つて居る人の戰死をきかさるる　喜谷六花

訪鎌倉禪居庵二句

松風は山の上ふく足袋ほこりのままに來て緣先

路の草にして風あり僕達坐すに炎天の石

いよいよ盆の夫婦で南瓜の實花の朝を語らひ

山に來てゐる子父の手をとり晝の葛の葉が大きい道

夜目にも日燒け小供のゐないもう一月の夜食

鎌倉雜記

荻原井泉水

けさも早曉から空襲警報である。おかげで子供達はいつもより早く起きて、朝食までの時間に庭の草取りをしてゐる。庭の一方には芝生を掘りかへして作つた防空壕が大きな口を開いて醜いほどに土の肌を荒らしてゐる。他の一面に殘されてゐる芝生には、一本の雜草をも許さぬほどに清掃をする。此の矛盾したやうな事が決して矛盾ではない。どちらも眞面目の事なのである。家内は緣側に丹念に雜巾をかけてゐる。ラヂオは後續編隊逐次相模灣に進入しつゝありと叫んでゐる。近くの高地にある高射砲はポンポンと火のついたやうに打ち出した。今にも爆彈の一つが爰に落下するかもしれない、其の直前に雜巾がけするなぞ凡そ無意味のことだが、それも一概に笑ふことは出來ない、そこに日本人的な心構の眞實なところがある。ところで、私はけさ、何となく「漫ろごと」を書きたい氣持になつて、其後一年あまりペンを取らずにゐた此の「鎌倉雜記」を書き出してゐる。書いたものが右から左に活字になる世の中ではない。さりとて「物言はぬば腹ふくるゝ業」だといふ氣持でもない。たゞ、かういふ物を書いてゐると大さう涼しいのである。暑い時には、涼を納れるといふだけのことである。けさは、ひぐらしが好く鳴いてゐる。鎌倉はひぐらしの多いのがいゝ。どうやら、高射砲の音も止んだ。

×

去年の今頃は、此の鎌倉のやうな、市街地としても問題でなく、軍事施設は何もないところでは、防空壕の必要はあるまいと考へてゐたのだが、其後の情勢は、さうした安易感にたよりがなくなつて、私のところでも、芝生の隅に一ケ所、裏の山に一ケ所壕を作つた。裏山の方は横穴式にして一坪程、土の露出した濕氣を防ぐ爲に天井を張り、下は一尺ばかり上げてユカを張つた。二年程前、茶室を作らうと考へて、木曾から神宮の御造營に切り出した檜の餘材の檜皮を送つてもらつてあつた、それで三方の壁を張つた。ちよつと面白い物が出來上つた。これに荷物を納めてしまふ前に、防空壕開きの一席をしようと思ひついた。繩の模樣編みをした絨毯代用の敷莫座を重ねて敷くと、其まま二疊の茶席となつた。床はないが、正面に床置を据えて軸をかけた。軸は――「雲出洞中明」と一行に書いた天宥法師の筆。奥の細道に芭蕉の感想が出てゐる羽黑山の傑僧だる天宥であつて、如何には豪氣濶大なる其性格のあふれ出てゐる筆勢はひそかに自慢の藏幅である。花活は、取敢へず青竹の一節切を作つて、庭に咲き殘つてゐたさつきを挿した。さうして、近所の友人二三人を招いて、こゝで茶を喫したのである。さて茶室とすれば、入口に扁額もほしい。青葉町で茶室にかけてあつた良寛の「吳々」を掲げて「笑々洞」と名けるのも面白からうと考へた。だが、木額は火を呼ぶ危險があつて、壕の入口には不向きだ。額は當分やめておかう。然し、名だけは欲しい。で――「亦涼洞」と名づけることとした。これは防空壕に因んだもので――「心頭ヲ滅却スレバ火モ亦涼シ」といふ氣持なのである。

×

此頃は、新聞社や出版社などから、原稿をせき立てられる氣忙しさがないので、此のひまに自分の舊稿を整理する事に取りかゝつてゐる。散

文隨筆や俳話評論の類は、單行本としてまとまつてゐる物が凡そ百册餘り出てゐる。自分の手許にも無いものとても、全國の中に所藏されてゐるからと、豫て安心はしてゐたものゝ、此の數ケ月間に諸方で大分に燒失されたらしいのだから心細い。だが、一册も無くなるといふことも無からう。とにかく、此の戰火といふものが、戰爭以前の書物を凡て「古典」にしてしまつたとば云ひ得る。層雲の句集は、第一の「自然の扉」から第十七句集までは既刊してゐる。それ以後、第二十一句集の分まで四册分の原稿は整理してある。現今の情勢で印刷が出來ないけれども、原稿として出來てゐれば心殘りはない。自分の個人句集は第七句集「一不二」(昭和九年)まで既刊してゐる。昭和十年以後がまだ手を着けてゐない。今日の如き時局では、今日あつて翌の生命も期しがたい。自分が生前に整理しておかねばならぬものは、一日も早く整理しておく要がある。そんな氣持で、私は此頃連日、自分の句集の原稿の淸書に沒頭してゐる。いまは昭和十二年のアメリカ旅行のところにかかつてゐる。

一體、自分の句集の整理といふものは樂しい仕事である。先づ曾て遊んだ土地の其の感興や印象が再現される、牛が反芻するやうに其の心境と作品とを再吟味する。時間が隔てゝゐる爲に、以前よりも一さう客觀的に檢討することも出來る。私は再び、ハワイの綠の濃い光と影との中に立ち、眞珠灣へ行く道のオハイの並木に自動車を走らせ、大平洋のしづかな水平線と大きく交叉する椰子の木の夕月を眺める。或は又、千古の雪の殘るヨセミテの谿谷のホテルの一夜、星の美しさに眺め入つて眠られず、セコイアの公園ではフレスノから持つてきた葡萄を野生の鹿と一緒にたべ、手から取り落した杏ばころ〳〵と轉がつて栗鼠に拾はれてしまふ。そんな風景や情趣なども、十年を隔てゝ想ひ起すことは樂しいのである。且つこれが今は全く我々と隔離された世界となつてしまつた現在にして感慨の深いものもある。

×

命、翌を期しがたしといふ氣持は、此際、自分としての仕事もウンとして置かればならぬぞと思ふと共に、人生の樂しみも亦遺憾なく樂しんで置きたいと思はせる。と云つて、旅も不自由、酒も拂底の世の中である。せめて心のどかに書を讀む位の事である。五時、暑い日がすつかり影つてしまふ。蜩が書齋のすぐ前の松の木で鳴き出す。私は、芝生の上に籐椅子を持ち出して、何か一册の本を書棚から引き出してくる。「亂抽」といふ言葉がある。氣まぐれに、其時、目にとまつた物を抽き出してくる。此の氣持がうれしい。さうして、氣まぐれにページをめくつて、氣に入つた所だけを拔き讀みする。私は一日の樂しみ此時に在りと思ふ。

×

中江兆民の「一年有半」は其發行當時、私の學生時代に感銘して讀んだものだが、其以後手にしたことはなかつた。奥付を見ると、明治三十四年だ。今より四十四年以前、丁度、一高の一年級の時だつたのかと思ふ。「一年有半」とは、著者が喉頭癌を病み、醫者より餘命一年半なりと宣告されて、よろし一年半とはずいぶん長い時間だ、其間に思ふ事を殘らず書き殘しておかうといふ意氣で筆を執つたものだ。人物月旦あり、經世時言あり、文學批評あり、淨瑠璃鑑賞あり、斯ういふ多面多彩な、痛快暢達なる人物が活動してゐる明治時代はなつかしきかな、とも思ふ。其の一節——

堺市、濱寺風景甚佳なり、海濱松樹亂立して、其下縱橫步行して涼を取るべく……水天ほうふつの際、神戸及び淡路を看取するを得。一夕妻と俱に步して海汀に至る。……予、既に不治の疾を獲て、所謂一年半の宣告を受けて、而して妻日夜予に侍して藥餌の勞を取るも、是れ因より治癒を求むるにあらずして、唯死期を待つのみ。予や男子、且つ頗る書を讀み理義を解する者、箇中又自ら樂地ありて、時々大疾の身に在るを忘るゝに至る。妻の如きは女性、予の如く自得悠揚たる能はざるは自然の道理なり、予固より產を治するに拙にして、家に逋債有りて貯財無し、而して斯の重症に罹る、悲慘と云はゞ悲慘なり。此夕べ、予笑ふて妻に謂て曰く、卿年已に四十餘、予死したる後、復た再嫁の望有るにあらず、予と俱に水に投じて直に無事の鄉に赴かん乎如何と。兩人哄笑し、途中南瓜一顆と杏果一籠を買ふて寓に歸る。

×

一日の樂しみの一つは、夕べの蔬菜を摘むことにもある。尤も、私は手を動かすことに懶いので、大抵は私より先きに子供たちが摘んでゐる。「今日はいくつ」――妻の聲がする。――「茄子が五つ、胡瓜が二つ、トマトが三つよ」と女の子が笊をかゝへながら答へてゐるらしい。そんなちつぽけな菜圃ではあるが、これあつて夕べは樂しい。尤も、私は、蔬菜を穫るよりも、寧ろ蔬菜の句を穫る方が樂しいのだといふ方が眞實かもしれない。

○

豆が豆の蔓の子の脊伸びする手のとどく先

新俳句論研考（七）

新俳句精神と寫實に就いて(1)

西垣卍禪子

內容主義――形式主義

文學のイズムを二つに分けると、文學の對象となる思想のイズムと、文學活動を規定する方法のイズムの二つになる。卽ち、對象としての思想性、方法としての藝術性とであつて、この思想偏重が內容主義であり方法偏重が普通形式主義と云はれてゐるのである。

文學の新らしき發生は、大概形態の變革から始まつてゐり、固定してしまつた形態に對する不滿から、革新的精神が盛になり、先づ旣成形態を破らんとするもとに、精神のみが詩の本質であるかの如く考へられ、文學形態が變革せられるのである。されば、形態の變革がない所に詩の進化はないとも考へられるから、そこで形式主義の强張がみられるのである。

かかる考へは、應々詩に於ける本質問題をめぐつて、內容主義、形式主義の偏重的考へに陷りやすいのである。我々は藝術行爲の祕密に於ける、ジアンルの混亂はポエジイの母胎ではあるが、ポエムの喪失であることや、反對に、ジアンルが決定されるとポエジイの喪失であることに注意せなければならない。

そこで、寫實論に於ける「ありのままを寫す」と云ふ問題の內省に就い

ても、我々は先づ、これが思想性の問題であるのか、方法性の問題であるのかを考へてみなければならない。

俳句文學に「現實主義」と云ふことがよく云はれてる。この「現實主義」と云ふことは、思想性の問題と結び付くと、對象の現實と云ふAをAとして傳へるもの、即ち、文學を單にある思想の記述の手段とする寫生、「ありのままを寫す」と云ふ寫生論が生ずる。そして、この方法の自然主義は、勿論、對象の模造であることは云ふ迄もないが、浪漫主義によくある對象(思想)の超自然をそのままに模寫する方法も、また「ありのままを寫す」ものである。で、この兩者のリアリズムは、前者が自然主義俳句であり、後者は浪漫主義俳句であるから、そこには、「現實」と云ふ同じ言葉に、現實と非現實と云ふズレがあることを知らねばならぬ。即ち、一方は文學の唯物的な觀方であり、一方は、精神的な觀方をするものである。ただし、後者はその方法に無自覺であるから、文學の現實主義は精神的に流れると浪漫主義になるとも云へるのである。

ここに於いて、我々が注意しなければならないことは、自然主義の唯物的な觀方と云ふ方法は、まづ最初に文學を「文學といふもの」と云ふ範圍内で考へることの規定であり、浪漫主義はある精神の狀態のみによつて文學を規定せんとする方法である。と云ふことに就いてである。

換言すれば、俳句文學を唯物的に觀る態度とは、ある精神狀態によつてのみ規定しないこと、つまり、その精神の狀態を文學としていかに追求するかを規定するのであるから、文學に於ける藝術性とは、文學の方法の追求なのである。一方、ある精神の狀態のみによつて文學を規定せんとするものは、漠然と美と云ふ樣な言葉で、精神の狀態を與へるものが藝術であるとなすものである。

いづれにしても、偏重的な形式主義・內容主義の俳句文學は、俳句の韻文律、散文律問題、或は、客觀的寫生、主觀的寫生等の問題に就いて、多くの混迷をかもし、眞に正しき俳句詩論をなさしめていないようである。

意味の意味把握——方法の超自然主義

ポエジイの方法として使用する俳句の韻文と散文とは、そのエステツクに於いて一致するにもかかはらず、現象的に韻文俳句、散文俳句と云ふ如く二元的に取扱ふ混雜は、上述に關するそれの證左と云へる。

高次のポエジイ(絕對的生命の把握)としては、フォルムとしての韻文・散文を選ぶといふことに、本質的な相違はないのである。即ち、韻文のメタフイジツクは、その根柢である音樂への憧れの純粹な主知に於いて、想像力の自由な活動を可能とする秩序に歸着し、更らにそれは、散文のポエジイの本質たる意味の意味、即ち、生命的意味の直觀的な純粹世界に於いての想像力の秩序と一致するものなのである。(新俳句基礎論參照)

寫實論に就いても、普通、客觀的寫生と云はれてゐるものは、自然の再現と描寫に終始し、想像を排して現實の籠記であることを目的とする自然主義方法を云ふのであつて、主觀的寫生と云ふのは、普通感情の表現と稱されてゐるものである。然し、これは韻文の音樂のメタフイジツクな秩序によつて、無限化される想像力の活動に他ならなく、兩者共に

ポエジイの方法として使用せられる韻文と散文とは、そのエステテックに於いて一致することを知らない現象的な主張である。

ここに一つの問題が起こる。文學を唯物的に觀ようとする客觀的寫生は、尠くとも、單なる豫考された對象の描寫、記錄であつて、主觀的寫生とは、さうした對象の描寫・記錄から區別しようとしてゐる態度であるから、後者の文學的方法は文學の自然主義方法とは全然正反對である。では、我々の立場の「ありのままを寫す」と云ふリアリズムとは、どつちであるかと云ふと、我々は兩者の如く偏重的なものではないのである。しいて云へば、我々は藝術性としては「方法の超自然主義」であり、文學的對象の超自然主義との相違は、對象の超自然主義(ローマン主義)は、對象そのものを最初から超自然のものとして撰び、それを描寫記錄するものであるが、そうゆう態度ではないし、又、實感に卽するからと云つて、自己の思想のナマを表現するものでもない。方法の超自然主義とは、文學の方法の新らしい角度から文學が表現するリアリテの領域を擴大するもので、俳句文學を構成する文字の持つ意味を組合せ、根源的統一により對象の世界を擴大しようとするものである。所謂、文學的方法による世界の認識である。

それでは、どうして方法の超自然主義が「ありのままを寫す」と云ふことであるか。それは、俳句韻文詩が五・七・五の韻律美學にのみ止まらず、韻律の意味への交渉をもち、ポエジイ(認識)に於ける「意味」の存在を重視するようになつた所に發足するのである。(註)

すなはち、文學の他の機能である「根源的意味」を中心とする俳句文學の確立である。現象的に云へば、新しいポエジイ(新俳句律)の進まんとする方向として、フォルムならびに觀念の相互的に關係ある實際的な方向として、個性の歷史的現實(行爲の俳句の誕生)にあるのである。そして、そこでは、感情原理による精神の反應を擴大すること、卽ち、いかに訴へるかと云ふことにのみ價値を置く人間感情の傳達が、ロマンチシズムであり、リアリズムに關係しないことを先づ注意しなければならない。

リアリズムは描寫の價値であるから、描寫することの現實との一致を必ずしも目的とする價値ではない。それ故、そこでは、人間的なことを直接俳句文學の效果の批判的尺度とすることは危險である。リアリズムの價値とは、無意識的な夢の如きものでも表現できると云ふ文學的方法による價値であるから、描寫する對象の價値と混同することをさけなければならない。

一個の認識は一個の文字を撰擇させ、他の文字に變更すると、その認識は他の認識となる所に文學の方法がはじまる。そして、ここにこそ俳句技術の妙味はあり、單に認識を限定する文學の方法は、單に器具的な報告であつて、文學の價値に屬さないものであることを知らなければならない。從つて、自然主義の文學と文學の自然主義とを區別しなければならない。

(註) 內容尊重の自由律俳句にあつては、俳句の本質は定型の外在律に對して、內在律、內から生れる內容の韻律(或は音律)に依ると云ふ方法の革新にある。內在律とは五七五の韻律法則の破壞に代つて、音としての文字に與へんとした秩序であるのだが、作品の要素はすべて內容と

形態との二つに分析され、藝術として成立する條件の部面は、形體がもつ部面に係つてゐる。即ち、自由律が藝術の名に値してゐるのは、内容の價値をア・プリオリとしたところの形態の價値に重點が置かれてゐる。自由律の藝術的法則はやはり定型の如く韻文の形態に關する法則に依つてなされ、内容は依然と他の價値によつて批判されてゐるのである。他の價値とは文學の領域に於ける思想、乃至觀念の價値である。從つて唯一の對象が韻文の觀念とフォルムとに向けられ、内的詩史の反省が稀薄な爲にポエジイの進化に關しない問題に終つてゐる。

ここに注意すべき事は、定型律と自由律とに於ける文學活動を規定する方法に相違がある事である。即ち、兩者の内在律の相違である。この兩者を形式主義と見る時には、形式の名に於いて呼ばれてゐるものに部面の異りがある。一つは文字そのものを記述としてみる文學形式、他はそれをア・プリオリとする藝術の法則たる詩的形式（韻文の形式——形態）である。即ち「意味」の形式と音或は視覺上の形式とである。「意味」の形式がスタイルであり、音或は視覺上の形式がフォルムである。

されば、内容律とは——音としての文字に與へんとした秩序とは、スタイルであり「意味」の形式である。從來の自由律俳句は、詩形が單にフォルムに止まり、從つて、韻文俳句の古い秩序を破壞するに足るポエジイとしての方法論的秩序を持たればならぬ筈なのに、そこには詩的形態の破壞は完成したが破壞した筈の昔の俳句（舊認識ポエジイ）の觀念に逆戻りしてゐるのである。つまり、反フォルムを必要とする——ジャンルの混亂はかへつてポエジイの母體とすると云ふ觀念に於いて——新しい秩序の規定がついてゐないのである。かくて、舊自由律の内在律俳句は内容（意味）のもつ韻律によつて（先在的な法則を用ひないで）その記述に於いて長短錯雜する。それを視覺的に或は音感的に排列するものなのである。

指針を記す（八）

中塚一碧樓

工員と語らひつ雪路に肩の揃へる　藤田三六亭

工員と親しく話しながら雪路を歩いて行く、或ひは工場へ向つての出勤の途上でもあらうか。工員と話しながら歩いて行く事はいつの時でも愉快ではあるが、自皚々の雪を踏んで連れ立つて行く事は更に一入の快さであらう。一緒に歩いてゐて作者は今、ひよいと工員の肩と自分の肩とが揃つてゐるのを感じたのである。これは工員に對する作者の親愛の情からでもあつて、工員の肩を、工員の人のからだを感じる、强ひて云へば自分と工員の人とが一體でゞもあるやうな感をさへ懷いたのである。

作者は製作所に在つて生産に專念精進してゐる人である。かうした氣持で工員たちに接してゐられる事を思ふと、僕たちさへ喜ばしく、又大いに心强さを感じるのである。

わが繪わが側にありうすい冬雲の繪　伊藤彌太

作者は洋畫家伊藤彌太君である。作者こゝろを盡しての一つの繪、そ

れは今作者の側に置かれてゐるのである。作者はその繪を懷しみ、愛し、わが描けるこの一つの作品がわが側に在る事を喜び、これを云ひしれぬ幸と感じてゐるに相違ない、そしてその繪の基調を爲してゐるところの薄い冬雲の感をじつと味つて、靜かなる歡びを持つてゐるのである。

藝道に生きる者の至純なるこゝろが一句に自ら出てゐてよろしく「うすい冬雲の繪」と云ふので何となく坦懷といふやうなものが感じられ、好ましい一句である。

勇士を慰むる花を持ち時間を持ち乙女ら　吉澤稻市

或ひは白衣の勇士を慰問に行く時なのでもあらう。勇士を慰むる花を持ちといふ事は慰問者として普通の事ではあるが、「時間を持ち」は如何にも明敏な感じ方であつて一句に新鮮味を感じる。「持ち」「持ち」と言葉を重ねて表現されてゐるが、その一つは「花」であり、その一つは「時間」であるところに多少特殊なと思はれるほどの面白い氣持を誘ふやうである。

花を持つてゐる乙女たちの優しい姿が大寫しに鮮かに出されてゐるといふのみならず、「時間を持ち」でそれが自ら深さを持つてゐるところいゝと思ふ。

畫頃はこの位のあたゝかさに土と枯草　吉澤稻市

練達を思はす一句である。一見ぼうとしたやうに言つてあるが、これで神經はなか〳〵に鋭い。句末の「土と枯草」と云ふ表はし方も少しの餘剩もなく、好ましい言ひ方である。前出の「乙女たち」の句に比べて同じ作者のものではないと思はれる程の相異を感ぜしめて、此句は敢て新しいと云ふ方でなく、前々からあるやうな境地である。然し之は今後も、いつの時までも我々の失ひたくない淳良な境である事が思はれる。此句が或る句蓆で發表された時に、句座の一人が「何となう一茶を思はすやうな味はひの句である」と評し、他の一人が「……さうだ、一茶の一ばんいゝところで……」といふやうな事を云つたのを記憶してゐる。句の味はひにも句表現の調子にも一茶を思はした事がよく肯かれるのである。

しづかに子供のあたまにふれ厚い防空づきん　堀川屈人

防空づきん、それは三角頭巾と俗稱されてゐるそれであらう。子供のあたまにふれて、その防空づきんの厚さを感じてゐる作者は、その感觸から、たまらなくこの幼き者を慈しむ氣持に滿ちてゐるのである。句首の「しづかに」と云ふ表現について一寸考へさせられるのであるが、この「しづかに」が無いとすると、作者が何かの欝みにぴよいと子供の頭巾にさはつた或る時のやうにも思はれて、一句の心持が大變異つて來る事となる。これは此儘に「しづかに」と表はしていゝと思へる。「しづかに」といふ種の言葉を句の表面に出す事は多くの場合に表現が失敗に歸すといふ樣な話は僕も大いに贊成する所であるが、此句の如き場合は此「しづかに」がある方が結構であると思ふ。句表現の事も一律一概には行かない事である。

米にほふ草枯れてもの凄さん　三國屋白省

地の草々がだん〳〵と枯れてきて、四邊蕭條たる情を持つて來る中

に、婆さんと共に暮らしてゐる作者が、「のう婆さん」と其人に對して强い親しみを感じてゐるのである。ものもの〻匂ひの中でも米の匂ひは「のう婆さん」と口をついて出るに恰好の匂ひでもある。「のう婆さん」といふ放膽なる表現觀るべきであり、情すぐれ勢を持つた句と云ふべきであらう。

わが工場空襲の被害なし筏に少し雪あり　星野武夫

此場合の「筏に少し雪あり」はこの界隈の光景がはつきりと表はれると同時に作者そのものが實に明かに出てゐるやうである。靜かなること斯の如き作者の心が出てゐると思へるのである。

「わが工場空襲の被害なし」と云ふ表現も無造作にさつぱりと云はれてゐてよろしく、句に作者の健在を感じ、更に此作者の生産への健鬪を祈る事切なる心持になる。

笹原冬日湖に獲りし魚提げてゆく人　南晴星

一句何の搖ぶりもなく至つて地味であつて、而も句の底にある詩情實に滾々たるものがある。之を云ふ事を許されるならば、清新なる風雅とも云ふべきであらうか、僕は自然と碧梧桐先生の風格を思ひ浮べて誠に懷しく覺えたのであつた。

風雅臭のない風雅、これこそが僕らが望むところの本當の風雅であると云ひたいのである。

選句錄

○　卍禪子選

雨ふれば梅林のくれたさざなみ　照井稗人

しんじつ廣い空尊く征きて神々　大島葎花

みなをまちかもめなく春宵夜業　森谷乙山

船は港へ春淺い疎開の人を乘せてくる

曉星の如と罌粟の花の夏の始めを眼にも見るかな

ただの風景だつたが雲をつけて冷たくない薄氷に心が澄む

散歩をしたり林檎の持主も春を越す

手摺の處に出たが金剛山は八重櫻が遮る

村落はまだ遠く山茶花どんよりとした季節　鎌倉白羊城

葉影の清水へ耕しては下りてくる

月とも我れともただ明るい夏夜　山木六合

消燈それからはしんしんと雪降る

けふの放送全部終了机の子へ炭つぐ

靴に當る日しもやけかゆく薺びつたり地につき　村尾草樹

兵器事務連絡、街が新樹する

風鐸を國は玄冬なる春の雲

學科あり雲雀のうたは天に充ち　米倉勇美

生死超脫これが二十才の息子で征きます

三月晴れ切り若者は征く彼岸櫻　坂元呑空
月に浮く雲のひとむらの海を見るだけ
日々の戰況を待つて薄がほほける　森抱葉
佛砲塁へ向けたままな入港船が雨
さくらのうしろ空もよし雲もよし
さくら櫻仰ぐ蒼穹限りなし　松尾十樹
きのふの今朝となる和服となり土のべ
勤勞動員隊の歸る土橋で冬木の鴉　西垣碧禪
帆機船もやい燒け沈むみなつきの闇　佐藤吟雨
焦土の蝶一草もなきこのさまあやしまず　南畝三坡
泣きしやくり泣きほらした瞳で訴ふ冴へ返る
雪かき待避所の雪に顔がたうつしてみる兒　江部美智
お雛樣同じような顔でぼんぼりに灯をつけ　渡邊まき子
雪はれ徑一すぢ雜木林が見透かされる　高田千代子
誰もふまない野の雪電柱の影　佐藤鳴風子
はれがましい卵の一個ありてわが誕生日　池田總女
つゆの窓ひと機退去とありあぢさゐぴつしりと花　友定白鷺
梅も雷郵便屋さん南の便り持つて來た　石下谷乃不女
英靈となり母に抱かれ梅咲くを歸られ
馬車の鈴の音が時々吹雪の中　岡田初繪
鳥の夕燒ざる一杯の海苔で　林田照子
鶯が啼く何か唄ひ度い妹である　淺野光子
山々の淡雪けさ子達の聲明るう流れ
靜かさを配給知らせの鈴が机の水仙
英靈靜かに過ぎ牡丹雪明るい

石はこびゆく牛駄々人になずむ　川津一之
硝子戸なづる木の葉の影が患者をなぐさめる　鈴木梅宇人
吾子につむり刈らせけふの休み日たのし　河合英觀
冬の夜の大煙筒熔接の火がうつる　松村傘松
警報山に鳴りひびき冬空　戸田みゆき
小高き丘の我家に戻る私であり　池上澄江
梅ちらほらそれを切る華燭の家と云ふ　大野かつみ
舊正の鏡餅ひとかされ君ン所からもらふ　佐藤厚吉
めがれは茶色壁の秋の蚊がよろよろ　伊藤柳江
疎開の子紅に土地の子黑い着物一列霜の畔
うすつぺらな下駄の子通る殘雪所々
春日遲はしてゐる兒が日向ですし　保科滿藻流
畑へ下りた鳥の影が長い雪ばれ　中原路雄
山の平はにぎり飯食ふ火を焚く赤い顏　中原貞男
山は雲あしの早し南へ流れ松林越す雲　金井茂記
鐵瓶の湯を飲む今宵濁り窓の北斗星　宮本愛子
巨杤の枝々しげりすぎこしを猛し冬　平塚とし子
新道カーブず夜風河から面伏して過ぐ　增田滴水
夕冷え窓閉てん裏山裾に殘る陽の　横山吹笛
駒ケ嶽のあれ幾度か杤も若さ續け
寡生母を思ふといふけさのわたし姉さんかぶり
ある日の小型機ふき流しつけて機翼ふつて私に
毛蟲葉を食ふ音もせん山門に夕日
夏の日祭の神輿練り渡る大き團扇
浮木たれぬ蟬の鳴けるを夕日の雲

濟念寺うら日暮て百合をもてる影の長き　前川草人
安全旗高々梅雨あけの朝空禮をする　廣田葉蘭
焦土茫々向日葵の黄いな今ぞ怒り　平田マサ子
いとし戰の町とも知らずに集くうてつはめ　上條無庵
冬ごもり都住の子に送る藁草履なる　早川昇
身置く夕餉に青きもの滿ち足れり前線の兵よ　吉岡久藏
暖かな陽ざしの木屑にほふてゐて　鎌田一相
朝靄にぽつかり咲いてゐた梅　佐藤大峯
英靈を送る町は雨ともなる　渡邊一草風
梅咲いて草餅もあつて　加藤迷々可
あづきは塩だけのお餅は英靈の三回忌　加賀谷灰人
寡生ひとりのゐて草は茂つて畫のけしき　林幾代子
よくも溜つた煙突の煤で顏へしたたる雪　伴野龍
弔旗いちにち町の空雨曇つてゐる　平賀星光
蟬が鳴くや麥穗の倒る日の風　宇野豕篠
日なたの家の人のけはい梅ほころぶ　三浦保榮
薄氷のにごりなし火叩きを措く　伊藤孝一
家の中畫くらく奥の細々灯し冬　鬪口比呂志
冬は日の遠い海鳴り
警報解除の、夜がつくつてゐる影となつて別れる
濃緑の白南天をおごそかと思ふ
駒蹄手がない頰被で行く息が白い
うそぶくもいらいらし手の土の大根をつかれ
車故障を文鎭恰好と小石凍て磧づて
雪と思ひし空晴れの凍てて來北斗
夜かけて雪の葬りの穴掘るかほむら明りに　伊藤水穂
舟けばすなはち砂子貝蛸飯食ふ　池上耕山
ほうほう鳶の吹かれつ空襲雪まんじなる　衣浦眞
薺葉青き雪のなかうれし生きぢから　今井默天
壕の水筒はお茶を畫に苦くなつて冬の伸び　川口三角洲
娘の存在鉢巻の髪癖にて工場へ毎朝　木本梵天
溶けはじめた雪に茨の實のあるところ　立花しげり
照りつぐ冬日の屋根埃に白くけふも一機　戸島三更
疎開孫一人まだ學校前雪遊びして　濱名白香

○　井泉水選

月よりもランプはあかるい母と子　平松星童
つぼみ、さはればひらきさうなつぼみも
ちやわんの白さが靜かすぎる冬の夜とほいばくおん
犬と風に犬のやうに走つてゆく少年、冬　瀧山重三
あまりしづかに雪ふることはかの島火ともゆるか
寒ン夜の水が泌みるので腹に呑んでいる
春は白い雲杏の花そこが杏雲堂といふ
冬がこんなに靜かな八ツ手の花の下にゐる猫　植田市籠
雲がおとす影の山羊は白い療養所の、けふなど春
寺と四五軒の家と梅見頃の月が出た山のかたち
どの家も梅をもち水が落ちる段々畑月夜
うちの灯より月が明るくて一機きてゐる晩
なづなの花やまだ白い山は日光

日のおちたまはりの空が春立ちて二日三日する　名雪理輝
影がずんと伸びてきて麥の芽、畑のさきの海冬
ここから海が枯木いつぽん飛機遁走す　三好叢一路
朝日出てゐてさして來ない冬木一羽きて啼く
鴉鳴くほどに春は山の麓の一軒が石屋さん　佐藤逸仙子
蝶々、病院から出て俥屋とあるいていく
留守なさうで蝶もさつき歩いてきた道
おばあさま一人でゐなさる何やら莚の上蝶々
母の居ない妻になつて子の母になつて桐の花咲く　東松八州雄
雨がぬらしていつた橋の一軒灯ともり、春
旗には一句を、そして雪の一本道を送つてゆく
鐵塔冬山をよぎり松はあらしに耐へてゐる、銃後即戰場
ガラス戸越しに牡丹雪が降る自在の魚　上野忠三
雪の、とけて流れてゆくふきのとう
自在かぎのすすけた魚も外は牡丹雪になる
雪が水雪となつて降り込んでゐる池の面
さくら影も蕾んでゐる　木村幸雄
晴れて雪の手紙あつめてゐる郵便屋さんとポスト
電線はつきり影おいてその上を歩いてゆく、月
水脈の長い海が咲くまへの櫻の枝々（伊東）　宇佐美一歩
時報のあとのニュースも夕餉どきの冬の雨ふります
冬の海がくづれるところの一軒、道がそのまへとほる
夜はまつ暗な道を戻り家の桃の枝春のうるみもつてゐる
落葉、日昏れまへの風がある防空頭巾の子供たち　宇佐美一歩
ひざに抱いてボンボン時計に油さしなどする日ざし、正月二日

ゆきあかるくふりみづくんでゐる　落窪京太郎
ラヂオの繩とび音樂が沈丁の蕾にある日さし、もう春
花を切つてゐる人がゐて朝の言葉、教へに行く
けふから眼帶はかけないでよろしいとよ醫者を出る青葉
何か樂しさと云つたものが小さいタンポポの黄いろに日さし
返事ためてゐてけふは日曜の机ボケの一鉢　佐藤專子
田麥の出來ばえふるさと道夜に戻る
春雨ふらす雲の垂れさがる山の木々
うみどり島に群れ紀元節西日　水谷青史
來らばきたれ碧い空の下青い麥踏む
林に殘る雪の征く人を中に送つてゆく
雪が雨まじりになつて立つてゐる木の日がのびてゐる
ちらつきさうな杵の音のたうとう雪
粉な雪ふり出すとつもつてゐる木の枝　三浦清一
寒明けの水田の水の青いものが芹らしく
霜のとける音のしづかな空は晴れし靡耶も
雪の後を月にして元日のラヂオ終つたところ　高崎貞之
虹が雫してゐる
雲の切れたところには冬の星啼いて行く
小さな瀧をかけてすだけのうち住んでゐる
斑に雪あり國旗けいよう晴れたるなり　藻谷草士史
神風鉢巻まだまだあかるいベルトが廻る
空に一日友軍機防空頭巾で麥踏みしてゐる
水道たらたら氷らせずにおく音の遲い月で　淨心寺淳
雪に月照る火の見のてつぺんの人が動いてる

雪に雪降る灯をもらすまい機械のうなり　木野本鳥不止

このとき八十五の父を葬り手向の花種子畑に蒔かう　細谷野蕗

梅にまだ早い月ケ瀬に來て朝の小雨にかかつてゐる橋　飯田露草

バスはない伊賀へ三里串柿もらつて二人でありく　松岡着兒

寒鰤があがつた朝の防空頭巾女たち　吉田六郎

軍刀とそして水仙が活けてあつて靜かな　武田桂

横になつてからの流れの音がふるさと　栗栖ひろよし

雪明りが暮れてからの海にある艦　淺井冠二

梅の枝は朝日に活けてみなさん默禱をんなの先生　小田島義

冬日顯微鏡が伸びたり縮んだり菌を探してゐる　清正公樣冬木御疎開の前ちよつとお詣りして歸る

日がのぼると暗くなる木の影雪原　配給のこと耐乏のことを蕗の臺雨上つてゐる

夕燒け疎開跡に道が出來る　なんにもないところに星がでてゐる

春は早味噌する音に明けそめる池が一枚　川音が夜になる雨の若葉となる

渡されて燒場の鍵の手ずれたの　ひとりでゐてもたのしい芽がでる

この日雪殊に靜かに英靈の寫眞の黑わく　松が雪を落す月夜のポスト

八ツ手の花が咲くと月夜川の音もきこえる　夜が凍る星の座を縫うてゆく灯と見えて、爆音

父のない子と水のない川の冬の橋渡る　松のみどりが春も近い雨となつてゐて暮れる

雨が明るく瓜切りで瓜切つてゐる、冬　決意はかたし雪から芽が出てゐるので雨

月のひかり見えてくる凍りはじめてゐる　けふの戰果きいてからの夜る梟がなく

雪はゆきとけの畫の音樂の時間　コブシの花やお祭のばやしであるきこゆ

雪が雨に、水が水の音たてゐる　鐘樓に鐘が無うて夕月椿が落ちる

せきれいの胸の白さ何もかもおもひ出さする　雲に青雲の風晴れのして桐のさく

海が暮れるまへの山のかたち月夜になる　征く日の迫り今日の日はハザ結うて一日

山の線に雪がきて街の兵隊の帽子の雪　春、月あかりの銃劍が光る

梅に白い障子しめて櫓の音が通る　獨り身は思ふ事なし東風吹く浪は寄る

芦立陶抄子　冬木と星と、歩哨立哨中異狀なし

木庭皓龍子　よごれた雪に夕日の街に入る橋が松の並木

増村辰郎　雪が殘り夕日が殘り枯草

森田十雨　夕日と雪の山々と門の木に牛をつなぐ

本多閑麗　やけあとのお墓山吹そなへる

岡田琅玕　水くみためてみぞれふる今夜

三輪薫　配給は雪の日の白菜けふ當番

櫻田悠子　土も草もぬれてからのながれです

山は雨の、花は咲かせて枕邊におく

星のかがやいてゐるだけのふるさとをでる　横關碧樓
星がひくく見える空の芽ぶいて木がよる　里井正子
雪げの音に針すかして糸とほす障子の内　佐々木行人
空はいまし敵に備へて飛行雲の縄をたどるやうな早春風景
枕の頭に雪が、雪の川流れてゐる　高本三蕗
消えるよりも雪の積つてゆく製縄機動いてゐる　平岡國次郎
雪の鎮守様へまゐりもう春の頬白のゐる枝　栃本よし雄
松に雪の日のさせば雪掃いてゐる　清水寒太郎
このわたり山をちかくにわたのやうな雪が暮れてくる山
幾人りか送り幾柱かむかへ決戰ぞ、青葱いよ太り　川上湧泉
征つてから二年の梅咲いて細い三日月　阪部蝶三
雪の解けた日なたの枯芝　山岸稻青
橇は學生が曳いて辛夷が吹いてゐる　金平二火
今日は珍らしく女客がある雪の南天　村田白鵜
ここにひそかに梅がふくらんで居り墓
山の學校は冬晴れて居て體操時間のうつくしい雲
彌彦に雪がない日のひつじ田が二三枚
近い山も白くなつた川端大根舟つけてある
戰爭四たびの元日庭に青竹雪ふりつづく
壕の枯草もやや青みたる空にしてこのごろ
やれに雪の凍つた列車走り過ぎプラット晴天
寒シのすこし緩んだ日が山にあたり山の影する
これで雪がとける雨の池の汀のとくさ
今日は余程とけた雪のぶらんこの切れたつな
富士は野の向ふの山のうへ、法華の梅咲いてゐる

雪からながいさんばしも雪月になる　里井正子
ゆきがしろいくもがしろい月に一本ついてゐる道
教會の十字架と油繪のような松のある道が朝　佐々木行人
大根白う咲き百ケ日來る　平岡國次郎
橋板小鳥のあしあとのある朝わたる　栃本よし雄
雪の晴れて兵士送つて來て朝飯にする　清水寒太郎
空襲いくたびあるもつつがなし梅は蕾もつ　高橋政二
雨が雪になつて降り飛石の鶺鴒一羽　内久根聖巳
出でてゆく君工員、工場壯行會の辭わたし雪あさ　遠藤源治
麥の芽雨あがり防空砲みんな擬裝してゐる　青木美岐雄
はくれんかぜにつよくふかれて咲いてゐる病院のガラス　大山冬石
船を探してゐるやうな燈臺の灯が波、波に雪　白石一光路
淺い水ならさらさらとせきれい啼いて雪晴れわたり　近藤灰良
船の二つ三つとけむる岬と春雨海に降る
蕗が花になると土筆、疎開してきてゐる
木の影雪の積つて晴れた朝を出でて行く
波狀空襲、雪がふつてふつて吹雪となる晝である
光と影と、籠でなくと空でなく秋
秋ばくれ早い山かげの家もそのまゝいちぢく畑流れてゐる川
寒あけの日なたの石ころ
朝の日が奥山は雪のある町の屋根屋根
咲いてさくらが一本お墓のなかまひる
晴れて溫泉どころはまだ雪のある溝川の芹
花も盛りとなつて風吹く戰ひが海の中空の中
鴉も雀もけふいちにちの夕燒けてゐる松の木松の枝

水の光が早春の石に鶴鴿　關口江畔
斑雪の呼べば出て來る白い鷄が、朝
いい月夜で墓場も見えてゐる芽ぶきさうな
日が永うなつた賽錢箱　法雲寺三郎
庭も畑もまだ消えぬ雪の白い山羊がゐて啼く　澤木正
次の報導の時間が暮れおそい柿の若葉に雨
雪が解けると蟹さがしに行く子供達か　薗田三不止
杉の中からの流れの音がけふも雪解日和
町が出來て人々工場にゆく冬の日は曇り　武鑓青杏子
何處もここも疎開受入れの麥の芽豆の葉
にはとり木にとまり木の下昏らくなる　石橋重樹
てふてふとまるでもない花のしんくまつぴる
この町の松並木この町の人となるわが子に春　山田梅軒
荷物が先に着いてゐる庭の紅い實に嫁ぎ來て
雪、日暮れると月、家々底く　太平成正
豫科練二三人電車に乘り雪の村我村
月夜の白い犬ころ拾うてきた　高橋一洵
沙羅の花のような花の山鳩のこゑ
雪のけてぬく葱、その匂ひを　夏堀望子
爆音行く音の月雲を照す
日の延びてきたことは工場引け時の空にある雲　青應香
灯ともし頃は花屋のウインドの春の花に水兵さん二人三人　日向野秀策
時間は進發まへを母と一兵の清潔
やすませてボール盤のつやすみれ一りん　富岡草兒
老よりにそれを言はねばならないことを幾日藪鶯

汽車が汽笛を鳴らしゆく工場地帶四日程の月　照井燈光
木の芽交番は陽のあたる巡査さん
雨のもる傘でけふのとむらひすんでゐる　小原甲陵
工場歸りもこの頃月夜、雪みち唄つてくる
洲の雪少しあるのにせきれいさざ波よせてゐる　菅崎道雄
三日月四日月と暮れる時の家の後ろの竹藪
東天を拜し竹藪とわらやれと春の雪をおく
うぐひす、小さな草履は日南にぬいである
番傘にも雨の竹ばやし風立ちて見ゆ、春
お日様と、子供がうたふ杉の子の杉苗植ゑてゐる爺さん　中邨五倍子
とり小屋白いとり五羽ゐて元旦明けてゐる
冬が徑も青空もからから音たてて病院へつづいてゐる
芽麥畑のひろ月此頃少しは歩ける病人で
はたけのまだら雪と麥の芽と、鷄は二羽ゐる
明け近い月がこんなよい月となつて防空壕へ落ちこんでゐる　佐藤龍
言ふは易く行ふは、雪のだるまが陽を浴びてゐる
征く人たばこの煙へ雨が明るく早春です
雪の日の明るさ受話器の言葉メモにとる
かゝる世のかゝる時の冬木ぞつくり芽ぶきたり
春は雨の日の光を青い椅子で讀みます　菅無極
月が窗を明るくしてお地藏さん
風なく波なく降つて積んで枕のてつぺん
いよいよ積む雪となり青木の葉の其の實
朝日が磯の石　尊
雪の日配給の豆腐汁があり青柚子があり

梢桐が散つてからの日射しが白い障子で　御井弓弦

時計二つあつて一つはすこし遅れてなる冬

これだけも御奉公としてヒマの皮むいて日が伸びてゐる

好い日さしのあづきはあづき色の一粒一粒をより

盆のあづきは選りをはり空をゆく雲のかげり

月に寄りそふて星が明るすぎる冬　重村順孝

工員三三五五殘雪踏みて月ふみてかへる

峠にはまだ雪の、一寸した岩が腰かける程に乾いてゐて春

配給所の雀がなく屋根の雪であつて朝

冬月なつかしき兵は馬のにほひする兵　中西國友

けふも傷病全治者を送り療院雪解の日ざし强く

山燒の空をせなに山の衆山からおりる

雪の貨物列車のホームを通る長い長い通つてしまふ　三井不二雄

ガソリンスタンドと冬木二三本と富士が晴れてゐる風景

梅さく空の近く征くとしてその下通る

笑ひそめしと幼兒日記はつけまして雪の日の寢る前　吉村しをり

針箱に一日陽がてつたりくもつたり雪解してゐる

五時の音樂このごろ明るく竹林に降るもの白く

扉をあけると白い月夜でかへつてゆく　能智愛子

椿の葉かげ、眼に手をあてて泣いてゐる

壺にさして雪が折つた枝だといふ紅梅

神垣梅咲きし潮の音かな　桐井靖夫

河の石にも雪、流れ流れてゐる（歸省二句）

汽車の息づきも山は吹雪の故里近く

童共（わらべと）手ん手に竹橇を特幹の歌で行く　小野寺大葉子

庭畠大根穴の大根掘つてる日和の、はだれ雪　松村禎久

ねつかけみんなしてたうべ東京のことなど雪の夜

風に芽をもつ植木とベンチと池のささなみ　鹽田正吾

はるかぜがふんすゐベンチをぬらしてゐる

叱られておとなしい牛とわらんべと柿の若葉

松の葉もつさり雪つもりあたたかな　森口たける

雪に竹はれてゆく水の流れてゆく

冬空此の町の兒等に見せ物が來てゐるテント

教會の隣とたづねてきて此邊靜かな雪解ぬかるみ　澤木昭二

ゆけば冬田ゆけばせせらぐところせきれい

月光あきらかに荒海の爆音

黑い塀にちらついて積つてゐる雪が月のある晩

木に雪が朝燒してゐる一機二機東へゆく　梁瀨阿羅與

青空に描く飛行雲のするするときびしい寒さ、二機

勤勞奉仕の焚火はやらして梅は滿開　印南健治

雪の積みたる山畑のその家の鷄聲

紀元節なら梅の開くことの今年戰局苛烈

砲聲絶間なく壕の口凍空少し見ゆ　西本イチ

雪で眞白な傘さして人等勤めにゆく

雀來て鳴けば母が雪かきに出てゐる

今日も靜かに日暮が拔毛の四五本　堀切春扇

雪の晴間ほどの家からも出てお寒いことの、電線

星が出て月が出て蹄鐵工場夜業してゐる

水門からは水が春になる橋　內藤英夫

牛がゆきのふりやんだ木のはし、みづおと

みやしろ霜白きみたらしの杓を手にして　鬬根ふさ子
警報、髪けづつてゐる靜かな鏡である　五十嵐みい
桃の花は苗代の水へも散つて暖い今日　萩原和夫
白百合折つて貰つてこんなに澤山、峠を下りる　大中青塔子
心配せずに勤めに出ると云はれた骨はつた顏がもう（父逝く）　田口英夫
おとゝひまでは林檎がみかんが云はれたお骨である　入江孤燈人
梅の木いつぽんその花君は征く　森景諫郎
鉢は春である診察室このごろ　岡田花野
空少し青み松林の雪おちたりする　佐藤忠美
山々日毎白くなる此の道征く日まで歩みてゆく　平松二葉子
雪の中の町が灯つた風のない晩　谷口晃男
お年始に峠越えて町へ行きます峠の雪　瀬戸照子
つららの雫する畫となつて見てゐる　和田靈南
畠が雪の凹凸の向ふ國民學校はじまる　水野田々子
特攻隊けふも散る椿は赤く咲いてゐる　水田潤
落ちる葉は落ちてしまつて病すこし好し　吉川哲男
颯爽匂ふばかりとなつて碧空帽をふる　門藤康生
徹夜の友にはニュースを、朝の木々芽ぶいてゐる　久木野英麿
親犬日向へ仔をつれてゆく麥が一二寸　川口雅子
飛行機雲が金色になつて警報解除　高橋松二
星に風が出たともし火　鈴木畢衣女
降り止んでは春の水音　土井哲甫
雪が枯木の月夜となつてゐる枝と枝　梁瀬翠水女
水仙がすうつと伸びてゐる月夜です　木村ッギ子
又ちらちらする雪が枯木へからすが來る　橋本光男
ほんに昨夜の夢が今朝は雪降る雪降る（弟の死）　足立桂舟
配給になつてからの煙草でしみじみと雪の夜　永田二郎
お杜とほんに氏子といつた家々とあたたかい冬日　上山樹塘
礎石になると言つて雪の道まがつて行くか　高本三松
雪に立つ裸木の月上る　中山一鳥
鰯を煮て干して日のくれ鰯を燒いて夕めしにする
春は鳴飛びて甲信の山々雪ありて近し
雪に踏み込むふかくなる遠山は暮れて
小鳥鳴いて障子木の枝の影ばかり
田圃の陽のかげろまへの烏あちらでも啼いてゐる
雪と雲を乘せた山も暮れてゆく空にも雲
お藏の影ののびたその邊も雪晴れてゐる
雪から笹藪の崖の上にも一軒山羊鳴いてゐる
鬼打ちし豆のこぼれ花もあつて寮母室ですし
みじみ一人であることを冬山幾重
海はれて鳶の舞ふ松原拾ふによき日和
乏しい買物籠も勝つ爲の雪解道さげてゆく
ただに寒月の光さしてゐる涌つぼ
寒の夜雨に藁灰のみな濕れて
春雨、工場から歸る人たちも暮れてしまふ
チラチラと雪が警報遠く爆音
手の泥足の泥洗ひおとして月夜にする
とかくしても暮れて飾りする今年がをはり

一碧樓選

○

護國神社いまだも雪がちる空氣　相澤華芳

大豆淡泊きさらぎ日なかの家うち
野のなか溝すこし見える東風する
木々芽ぐむ微光御佛と在るこゝろ

春やうやく來る造船工場と在る埋立地　羽根田繁時

未だ芽ぶかぬ櫻木を見たり日々の訓練
聲なくどつと木の芽のやぶなかへ入り
わが軀のぼり得る崖匂ふ崖の枯草

枯芦あり兵の顏を吹いて春風　星野武夫

それは兄弟らしく畑にゐて牛蒡拔いてゐる
初夏杉山あまり高からず父がこゝに疎開し
父がゐる六月爐のほとり少し冷えて

父を一人置いて戻る道の青芒ゆるゝ　三國屋白省

道のさくらんぼたべるにもう日のかげり山國
寒明けの射光すゞめみんなとびたる
ま冬生きてゆく母と生きてゆく子供と

冬一木一木のまるみ重く物を著る　吉澤稻市

雪が消えつゝも消えつゝ土が見えるでない
じゃが藷の花と蝶々が兩方白い
水の近くにたつ草が雨になる雲の下のうれた麥

川の際川の風そしてその近邊の畦切　岡本五郎

蠶飼籠洗ふ川に居るに葉櫻が一本
雪だるまつくる子が帽子かむり雪の反射顏にうけ
子供が雪降るを見てゐる窓少しをあけて

牛車と牛車ゆき合ふ道をしつかりふんで歩く　河村とし魚

掃きし箒目のまゝ氷りし凍道を庭をぬける
道を朴の木花さきし端麗山のふもとに
一機をおもふ春の日昏れる山の稜線

牛こげいろのからだ草のなか夏の日を意識す　富岡のぼる

古い佛壇の中に置く馬鈴薯まるい一つを
みな水牛冬の日丘をうごきをる
據がつゞく冬山と冬山がつゞく

立ちて一兵莞爾餅をもむなり　龍田眞魚

冬の日こゝに草を燒く火を放ちすゝみ
こどもたち旅立ちぬ家に沈丁にほふ朝
春朝窓をあけ冷飯をくふひざし

遠くの聲が消えて春晝流れから水を汲む　山崎多加士

麥立ちずつと道を通るある日この時
學徒一隊がをり工場或日の春雷
風ふく藤の花咲いた水

花菜の向ふの人鍬をもちて　齋藤冬三

路のみんな知人のやう葉ざくら
我等同胞と僕妙に桃二枝手にあまり
その方に櫻芽ぶき行く人あり坂

白くてこまかくてわれらこの國のこゝめ花
この櫻大きくて澤山芽ぶいて防空頭巾放さないをなこ

甕に寒九水蓄へて母しめる繻子帶　三雲城東
寒海苔摘み・くれば厨神棚の燈明　澤渡倚之
工員書を朗誦す日させば光る雪肌　近藤紫村
少女受驗日を待つ溢れる溝の雪汁　山本光王
女はアイヌにてうるはしく日々雪野の水を汲み　藤田三六亭
兵は脚絆つけ發つ寒明けて山の空氣　村上芳男
子供が眠る寒夜兵服ですわり　宮本夕漁子
放たれた馬家ちかくゐる枯野ひろびろ　林さあを
牡蠣をむくをんな冬の海の汐どき　黒丸古生
細い繩を張り日あたりへ籠の若布ほす夫婦　後藤零丁子
山のさくら滿開する小舟あり干潟あり　田邊慶風
うすぞら一機の爆音なきゝ地は桃の咲く花
吹雪もどりつきし吾家が戸口わが犬
穹あをし青き實かたくつけて茶の木
藪かげかんざういでいつからか裂けし家の土塀
冬のすゝきと立つ家まはり一樹二樹の幹
佛に供へるもの雪明りお佛の名をよみ
無言對坐して彼氏どんどん雪のふる夜
歩哨に春の雪降りかゝるその顏
庭市にきて歸る庭に吹雪く道べ
小鳥ひくゝくる地の霜くづれありて
機械順調の轟音に立ち男冬の日
殘雪あり檜葉垣に檜葉の秀があり
壕あり殘雪あり家に汁あつきをすゝり
栗の皮よりは胡桃の皮ふるさと
くろごまのくろいいろをわが桝古りぬ
二月分貯蓄ををさめ障子のあかり
木の梅の花白うして人焦る
掌にのるほどの摘み韮の青さ頒つ朝
一握りの韮を摘み朝の家に入り
韮ひたし匂ふ朝食卓せまくこの頃
暗い中に身をかため踏む土雪の音ある
ひたぶる陶ものを愛す一人の男春が來た
落款激しくて新鮮岩魚と青笹と
觀音經一卷と吾等親子この室
土味この陶ものゝ高臺ありて早春
女に嬰兒泣く冬菜密生　須貝秀
新雪の荒野來し人の眼ざし
炬燵へ燈下げて抱かれたい子を抱く
一冬の縣菜煮てしまふ妻に窓の厚雪
野菊の花山を風が鳴り渡り　奥谷魚石
今朝の霜吾等の工場も白し
母すこやかに在す地の草の冬の芽
假小屋に馴れ日々芽を張り小米櫻
雪路つれだち歸るは疎開のこども
冬夜家族の着物ぬぎそろはせてねむる
雪降りかゝる一字一堵のかたち歩いてゆく男
松根を掘るいつ心松根をほりたらず春の日
鑛夫の妻が下りる雪消道家を離れ
雀また雀雪割りの庭

櫨をひくにたんな聲を揃へて　大倉親英

藁沓の雪さはり木の間晴れる　永井はるを

砲聲遠ざかるに男が佇つ霜解の路地　佐藤禾黄

我れは机に居る風に木々が搖れる二月　中川尙三

凍庭に砲聲がやみ飛んでゐる雀　牧野秋風嶺

爐邊にゐる我れ圓い灯影のなかの存在　佐藤豁山人

日々つぐみが飛んで塚の深さに立ち私　松原颯々

冬日曇天の雲に唄ひ圓陣兵らわれらは　井上星樹

その靄が部落吾らに凍て土かたく

砂丘が續くと部隊がつゞくと一月太陽

祈念みんな雪の中に一樹椿のつぼみ

朝熱い干菜汁あり春霞ふり　沼文生

大根煮を口にする冴返る軒に來る雀　本間昇

雪消ゆる音あさを壺の桃が咲きかけ　金子曙山

寒菊を挿し背へあたる風あり夜　口田朴也

木枯山よりぐる木群ありて廣野へ　御所窪けさし

山頂雪まばらにてくらし疎開學童ら　渡邊碧山樓

柴漬するに小さき渦を見る歩いて見る

山路岩かげとなり冬日背に射し

汽車は煙はいてゆきさりこほりの湖面が見え

兵隊敬禮にこやかに立つてあかるい雪道

仕事をはりそつと窓に二月西日す

朝は爐の火暫しおこらずわが脈搏あらは打つ

馬は廐に寢たまゝを冬の日眼を開き

砲車解體兵らかついで山の草枯れ

砂地にして雪解乾きしところより松根ほり

ガードに入つてゆく人々土堤の草青し

門外のみどりあかしや高い樹に茂り

雲浮びけぶいちにちのことを想ふ夏の日夕方

溝あり水動かないそれにうつり冬空冬の雲

凍土かへす男なれない鍬きつく握りし

荷籠の底にある霜にあふた葱の二束三束

庭に徑ありこれらふゆの石といふべく

ゆきふる田に溝があつて女人がうごく

雪ふりうちの田このやうあり堆肥あり

皇土かしこみて種をまく四月代田の水に

靜かに突擊のかまへ乾菜壁にかゝり

茶の花白う咲く必勝の心動かず

春寒日照りかぐはしき溪を行く

嚴寒けふ一機雲に入りゆくさま

鉢に慈姑枯れてしまふた水あり

樅のうれ樫のうれ雪に明け吾らの祈り

道を皃ら竹下駄に滑り入る冬木楓林

向つ山脈よこのあたりの雪の芒たち

冬日しづかに藁を噛む黑牛の頷

けさも工場へゆくひとに雪消えし麥の畝

すこし空間ありそこへ若葉する木あり

雪みち來われに松の間にみえて海昏し

雪の上堆肥積みほのあたゝかき堆肥

船捲き揚ぐる機械響き船體どつしり春の潭に

編輯後記

○本誌は遅刊を取返す事に目下けんめいである。作家で罹災した方はおちつき次第住居の御報知を願ひたい。本誌再刊に就いては地方同志の絶大なる御協力を得、特に花卷同人、伊那同人諸君の御厚志に對し茲に感謝する。今後も引續き積極的に御協力を御依頼しなければなるまいと思ふ。

○本誌の「俳句日本作品」社選に就いて問合せがあつた故お答へする。俳句日本は最早一小社の機關誌ではない。新俳句壇全體のものである事は前號に申上げた。その意味で日本出版會は本誌の再刊に深大なる支援を下さつた。かく公機としての本誌が選句録だけあつて旗印のない時は、業者の經營するものと何等異らない。從つて旗色たる俳句日本作品欄は是非必要であるが、次の事を述べたい。俳句日本作品は選者の互選とは云へ方途を示す新作品の見本ではない。私に云はしむれば、層雲、海紅、陸の永い傳統が五目に掲載されてゐるのである。一句の價値としてはそれでいい。然し、段々とこれられて行くうちには作品がだんごに成つてしまやせぬかと思はれる。これは互選に問題があると從來から云はれてゐる。で、云ひたいのは、新俳句運動とは「行爲の俳句」の建設であり、歴史が諸君の行爲によつて作られる樣に次代を背負ふ作家によつて俳壇は作られる事を先づ自覺してほしい。即ち、選は作品の價値を目的とし、作句は時代を作る事に價値を置いて貰きたい。ゐかれんかなの作句態度は、藝術的使命に目を塞でゐる者である。（卍禪子）

投稿略規

○論文、隨筆等、（なるべく簡契なるもの）

○俳句日本作品（社選）
句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○選句録
荻原井泉水選のもの神奈川大船町建長寺前荻原井泉水へ
中塚一碧樓選のもの世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ
西垣卍禪子選のもの足立區伊興町狹間八八七西垣卍禪子へ

○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、締切　毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各社の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

一册分　金八十錢（送料五錢）
六册分　金四圓八十錢（一册五錢）
十二册分　金九圓六十錢（同）

○前金（なるべく小振替）で御拂込下さい。

○必ず何月號よりと御指定の事。

○御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第十一號
昭和二十年八月廿五日印刷納本
昭和二十年九月一日發行

發行人　中塚直三
編輯人　西垣隆滿
印刷人　石上利雄
東京都立川市曙町三丁目五五番地
印刷所　行政學會印刷所
東京五

發行所　俳句日本社
日本出版會會員番號一一五〇〇四
東京都足立區伊興町狹間八八七

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

定價金八十錢